薬史レター

第 59 号

日本薬史学会　　JSHP　　2011年3月

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16　（財）学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局

TEL (03)3817-5821　　FAX (03)3817-5830　　URL *http://yakushi.umin.jp/*

2011（平成 23）年度　日本薬史学会　総会・講演会案内

下記により、2011（平成 23）年度・総会・講演会を開催いたします。

日　　時：2011（平成 23）年 4 月 16 日（土）
場　　所：東京都文京区本郷・東京大学構内
総　　会：14 時 00 分～　薬学部総合研究棟 2 階・講堂
公開講演会：15 時 30 分～
・嗅覚研究の歴史―日本の神経生理学的研究を中心に―
澁谷　達明氏（筑波大学名誉教授）
・中国薬学史活動の過去・現在・未来
郝　近大氏（中国薬学会薬学史専門委員会）
懇 談 会：18 時 00 分～（会費 4 千円）東大・山上会館

なお、本年の理事・評議員会は、別にご案内のとおり、総会の前に、昨年同様、同じ建物の 10 階の薬学部・大会議室で 12 時 30 分（受付開始は 12 時 00 分）より開催しますので関係者はご出席下さい。

秋の年会の予定についてのお知らせ

日　程：2011（平成 23）年 11 月 12 日（土）
場　所：名古屋市・金城学院大学薬学部
年会長：河村　典久教授

演題申込み締切日などについては次号に掲載

3 月 11 日午後、突如として発生した「東日本大震災」の被害を受けられた会員の方にお見舞い申し上げます。

日本薬学会　第131年会での薬史学関係の発表

2011（平成23）年3月31日（木）　静岡市
ポスター発表　ツインメッセ静岡大展示場のP会場
9：45～15：30掲示（当該学会は東日本大震災のため中止となったが、紙上開催という形で、発表は行われたものとして扱われる）

31P-6932～0937

・薬学史

31P-0932　日本におけるマラリアの対処と治療に関する研究
○牧純[1]、菅野裕子[1]、西岡茉莉[1]、村田安紀奈[1]、今泉駿吾[1]、秋山伸二[2]、西岡麗奈[1]、関谷洋志[1]、難波弘行[2]、玉井栄治[1]（[1]松山大薬感染症学、[2]松山大薬臨床薬学）

31P-0933　日向薬事始め（その11）―日向における蘭方医術の嚆矢者、岩切芳哲とその周辺―
山本郁男[1,2]、宇佐見則行[3]、程炳鈞[1,2]、○岸信行[2,4]
（[1]九州保福大薬、[2]九州保福大QOL研究機構、[3]奥羽大薬、[4]宮崎・日向・富高薬局）

31P-0934　大阪道修町における薬種扱いの変遷（1）　―薬種業から化学工場へ―
○多胡彰郎[1]、宮崎啓一[2]（[1]長岡実業、[2]三栄化工）

31P-0935　大阪道修町における薬種扱いの変遷（2）　―薬種業者から化学・医薬品関連商社および医療・理科学機器扱い会社へ―
○宮崎啓一[1]、多胡彰郎[2]（[1]三栄化工、[2]長岡実業）

31P-0936　1940年代後半に見られた精神神経用剤の新聞広告とその背景
○五位野政彦[1]（[1]東京海道病院薬）

31P-0937　ある物理学研究室の挑戦（第2報）
○串田一樹[1]（[1]昭和薬大）

（財）日本国際医学協会第50回国際治療談話会総会の講演より

末廣　雅也

日本国際医学協会の起源は小児科医であった故石橋長英博士（1893～1990）により1925年に医師の卒後教育を目的として設立された医学談話会に遡ることができる。同会は2010年11月25日に日独交流（医学・薬学）150周年の記念行事を東京プリンスホテルで開催した。

ドイツ連邦共和国大使フォルカー・シュタンツェル閣下と鈴木聰男東京都医師会長の祝辞に続いてW.ミヒェル九大名誉教授の特別講演「近世から近代へ ―日独交流における医学と医療」、ミハエル・チエルノフ博士（東京女子医大先端生命医科学研究所）による石橋記念講演、脳疾患に対するガンマーナイフロボットマイクロ手術― 考え方と結果、「医学・薬学講演（1）　ベルツ、スクリバによる日本医学育成と後世への影響」日本国際医学協会会長、都築正和東大名誉教授、「医学・薬学講演（2）　日本における薬学教育、研究の黎明期」日本薬史学会　山川浩司会長、最後に上智大学　アルフォンス・デーケン名誉教授の感想「いのちの尊さを考える ―死の準備教育とは」の講演が行われた。

この記念会の講演のうちミヒェル九大名誉教授と山川会長の講演のあらましを紹介する。

17 世紀にオランダの東インド会社が長崎の出島商館を開設して医師のポストを常設したことにより日本人医師がヨーロッパ医学に接触する機会を得た。出島の商館医のなかには幾人かのドイツ人医師がいた。カスパル・シヤムベルゲル（1623 ～ 1706）はライプツィッヒ出身の外科医、エンゲルベルト・ケンペル（1651 ～ 1716）は北部ドイツのレムゴーに生まれ医学を学んで、スウェーデンに行き、1683 年ペルシャ訪問使節団に加わった後オランダ東インド会社の軍医に就職し、出島には 1690 年 9 月よりの 2 年間の滞在であったが、今村源右衛門英生、樽林鎭山らの通詞と親しく交流し、商館長の江戸参府に再度随行する機会に恵まれて、帰国後、*Amoenitates Exoticae*『廻国奇観』（1712）を刊行した。Heutiges Japan は遺稿となり、イギリス人収集家の手に渡り、The History of Japan『日本誌』として 1727 年に刊行された。

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（1796 ～ 1866）は 1823 年に渡来し、翌年鳴滝に薬草園を併せもつ塾を開き、門下生の教育を行なった。その門下生は彼の日本研究に「協力」することになり、ものと情報の収集、対象物の観察、比較、整理及び研究成果の執筆を身近かに体験できた。蘭方医学（実はドイツ医学がオランダを経由した）の研鑽に長崎に集まった俊英はポンペがつくりあげた養生所、医学所、更にボードウィンの設立した分析究理所に学んで明治維新を迎えた。この医学校は精得館と改稱された。明治元年に長与専斎は医師頭取となり、長崎府医学校の校長を勤めたが新政府に招かれて上京し東京医学校の創設に与った。招聘されたプロシアの軍医ミュラー、ホフマンその後、後継者として来日したドイツ人医師は荒れ地を開拓する必要がなく、丁寧に地ならしされた医学教育の畑に持参した種を蒔くことが出来た。

山川会長の講演の概要は、明治新政府が徳川幕府時代の医学所を接収して、大学東校（今日の東京大学医学部の前身）がつくられた 1871（明治 4）年にドイツ陸軍軍医のミューラー少佐が赴任して来たとき、彼は西洋医学をとり入れた教育をするには医学と薬学を併せて導入することの必要性を提言したので、文部省医務局長であった長与専斎により 1873（明治 6）年に製薬学科が設置された。ドイツ留学より 1874（明治 7）年に帰国した柴田承桂は日本人としてはじめて、製薬学科本科の教授に就任した、製薬学科の第一期生下山順一郎、丹波敬三、丹波藤吉郎は卒業後に大学の助手（後に初代教授となる）として勤務したが、後進の育成のために必要な日本語の教科書をつくった。柴田承桂より遅れて渡独しベルリン大学のホフマン教授の許で助手として研究を続けていた長井長義は 1884（明治 17）年に帰国して薬学科の教授となった。

これより先 1874（明治 7）年に医制が発布されたが、1889（明治 22）年の薬律（薬品営業並薬品取締規則）の付則で、医師は自ら治療する患者に限り（当分の間）薬剤を調合販売することが出来る、ということになり、医薬分業は骨抜きとなってしまった。

明治になって築かれた日本の薬学の研究は世界の薬学、薬剤師教育、とは異なる独自の途を歩み天然物有機化学では世界に誇るべき業績を挙げてきた。2010 年、漸く薬学教育は六年制に移行して、医療に従事する薬剤師を養成する薬学教育が実施された。

1880 年に長井長義により設立された日本薬学会は薬学研究の成果の発表をする機関の伝統を引きついでいる。薬学者として日本が世界に誇るべき天然物有機化学の研究をなしとげた、朝比奈泰彦、近藤平三郎、落合英二、津田恭介の諸先生はいずれもこの分野の研究で文化勲章受章の栄に輝いた。

2006 年に薬学部の教育が創薬科学を目指す薬科学科（4 年制）と、医療研究を目指す薬剤師を養成する薬学科（6 年制）とに分けられて、6 年制のコースの学生は 2010 年より薬局および病院薬局という医療の場に於ける薬学実務実習が始まった。

NHK ラジオ放送（深夜便）「あすへの言葉」に会員の放送がありました。

(1) 霞ヶ浦をみつめて 50 年 (2010 年 8 月 2 日放送)　　奥井　登美子

NHK のラジオ深夜便の中で、「あすへのことば」というトーク番組がある。

『霞ヶ浦を見つめて 50 年』というテーマで 40 分間、昨年の 8 月 2 日に放送した。

土浦の自然を守る会が出来て 40 年。開業医の佐賀純一さんが、呼びかけて結成した。当時も、今も、ささやかな市民団体である。「地域医療」という言葉すらない時代に、地域医療と水問題を直結して考えたのは、佐賀さんはじめ医療関係者が多かったせいかも知れない。1980 年、半導体企業の大きな排水口が、霞ヶ浦の水道水の取水口のすぐ前に出来てしまった。県は SS など、5 項目で一月 1800 トンの排水を許可していた。排水はすべて水道水に入ってしまう。その頃の半導体企業は超先端産業でしかも国際的。排水も企業秘密。みなで寝食も忘れて半導体の勉強をした。私の学生時代に「森永砒素ミルク事件」というのがあった。叔父が、当時、森永本社の課長。事件に遭遇して、会社がどんなに大変だったか、苦労を見ていただけに、私は、もし、事故が発生すれば一番困るの企業ではないかと思い企業の誠意に期待した。私が結婚した時、兄の奥井誠一は、東大の衛生裁判化学の助教授をしていた、兄からも砒素などの事故の話を聞いていたので、霞ヶ浦水道水の砒素、フッ素などの化学物質汚染だけは避けたいと思った。土浦医師会は何かあったときのための声明文まで用意した。この排水問題は企業側の努力で、排水は一切しない、クローズドということで無事解決した。今、その頃のいきさつを知らないその企業の社員は胸を張って『排水の浄化はわが社の誇りです』といっている。

「土浦の自然を守る会」の事務所は薬局。兄の親友、亀谷哲治（故人・元星薬科大学学長）さんの長男紘一さんの設計で、薬局なのに楽しいおしゃべりのスペースがある。40 年も続けてこれたのは、いい仲間にめぐりあえた事。遊び、楽しみながらいろいろな調査をしてきた事だろうと思う。

(2) 放射能研究に殉じた父の足跡 (2010 年 12 月 10 日放送)　　山田　光男

山田光男・当会名誉会員の父・山田延男博士（1896 ～ 1927・以下山田）は東京帝国大学航空研究所助教授であった 1923 年 11 月に日本から初めてマリー・キュリーが主宰するラジウム研究所に留学して放射能研究に従事し、帰国後、放射線障害のために 31 歳の若さで死んだ。山田会員は、父の研究の足跡を検索して、スエーデンでのノーベル賞授与日に因んで 12 月 10 日のラジオ深夜便でその内容を放送した。以下にその概要を述べる。

山田が留学したラジウム研究所には、ノーベル物理学賞、化学賞を受けたキュリー所長のもとに世界各国から若い研究者が集まり、放射能について最先端の研究を行っていた。山田は、キュリーの指導を受けて、後に人工放射能の研究でノーベル化学賞（1935）を受けた長女イレーヌと研究を行い、その成果をフランスの学会誌に共同および単独で報告した。イレーヌは、母・マリーといつも手紙を交換したことは有名であるが、1924 年 7 月の母あての手紙のなかでイレーヌは「山田が新しい工夫によって強い放射線源を得て良い研究成果を得た」と報告した。この山田の成果がイレーヌのノーベル化学賞受賞に寄与していると近年、内外の注目をあびている。

山田は、パリでの研究を終り、アメリカでヘリウム事情を調査し帰国（1926 年 2 月）したが、間もなく病因不明の発症で倒れ、勤務先東大所管の医学部附属病院稲田内科に入院した。当時、日本の医学者は放射線障害症の経験は皆無で、エックス線診療科もない時代であった。山田は病床でパリ留学中の研究報告を纏めて東京帝国大学に提出し、理学博士を授与された。山田はキュリーに「日本で理学の学位を取得するのは非常に難しいがキュリー所長の指導により取得できた」と深い謝意の手紙を

だしている。山田は入退院を繰り返し、1927年11月1日に31歳で死去した。当時、山田会員は3歳で、死因は奇病と知らされた。近年、日本の研究で、キュリーの実験ノートおよび山田の海外旅券から夫々放射能残存汚染が検出され、注目されている。

上記内容の40分間の放送が、NHKデイレクターからの質問に山田会員が答える形でおこなわれた。詳細は薬史学雑誌Vol.33.136(1998)、Vol.34.29(1999)、Vol.43.12(2008)の原報を参照されたい。なお、本年3月11日の東日本大震災による福島原子力発電所崩壊を考えるとき、山田の放射線障害による死去が身近の存在として感慨深いものといえよう。(編集・末廣雅也)

◆支部だより

(1) 北海道支部

日本薬史学会・北海道支部　平成23年度総会・特別講演・会員発表

会　　場：札幌コンベンションセンター
総　　会：2011(平成23)年5月21日(土)　13：00～13：30　207号室
特別講演：　　同　上　　14：00～15：30　207号室
会員発表：5月22日(日)　9：00～15：30　大ホールB(1F)

平成23年度総会	進行	常任幹事	関川　彬
1．開会の辞		副支部長	高田　昌彦
2．支部長挨拶		支部長	齋藤　元護
3．議　事			
1)報告事項			
①　平成22年度事業報告		常任幹事	吉沢　逸雄
②　平成22年度決算報告		常任幹事	本間　克明
③　平成22年度会計監査報告		監　事	千葉　博志
2)審議事項			
①　北海道支部会則の改訂		常任幹事	古川　薫
②　平成23年度事業計画(案)		常任幹事	吉沢　逸雄
③　平成23年度予算(案)		常任幹事	本間　克明
3)その他			
4．閉会の辞		常任幹事	西部　三省

特別講演	座長	財団法人北海道薬剤師会	顧　問	大森　章
病を癒やす　～人とくすりのヒストリー～		内藤記念くすり博物館	館　長	永縄　厚雄

会員発表

1．「後志」の薬史（Ⅲ）―局方無機医薬品およびそれらの原料―

○小松　健一、木村　充博、吉沢　逸雄

2．北海道におけるケシ栽培　○山岸　　喬

(2) 東海支部

日本薬史学会・東海支部・講演会の開催

日　　時：2011（平成23）年3月20日（日）　13時30～14時30分
場　　所：名城大学・名駅サテライトMSAT　名古屋駅前桜通ビル13階
名古屋駅地下街ユニモール②番出口上がり正面
名古屋市中村区名駅3-26-8（電話：052-551-1666）
主　　催：日本薬史学会東海支部

講　　演：くすりの道修町と少彦名神社（神農さん）
演　　者：宮本義夫（くすりの道修町資料館・館長）
参加申込：当日申込（予約不要）
参 加 費：無料（どなたでも参加可）
連 絡 先：〒468-8503　名古屋市天白区八事山150　名城大学薬学部准教授　飯田耕太郎
Tel：052-839-2710　E-mail：iida@meijo-u.ac.jp

(3) 関西支部

第３回　日本薬史学会・関西支部研修会報告

日本薬史学会・関西支部　　**宮崎　啓一、多胡　彰郎**

2011（平成23）年1月22日16時30分から、「くすりの道修町資料館」（大阪市中央区道修町）で「第３回日本薬史学会関西支部研修会」が開催されました。講師の羽生和子先生（日本薬史学会・日本医史学会所属）には「江戸時代、漢方薬の歴史」と題して話題をご提供いただきました。

本研修会における羽生先生のご講演内容を次のとおり報告いたします。

①「日本における唐薬輸入受容の歴史」

天平時代に鑑真により持ち込まれたであろう唐薬に始まり、聖武天皇と正倉院に保存された唐薬と医学、安土・桃山時代の田代三喜および曲直瀬道三を中心とした当時の医学事情、江戸時代における漢方医学の発達が日本医学の発展に大きく寄与した。

②「本草学」から「実用医学」への変遷

「本草学」は中国的な博物学的色彩の強い学問であるが、江戸期には漢方薬の実用性が重視されるようになり、病気の診断や処方の方面で発展した。その発達が現在の漢方医学を支えている。

③江戸時代の医学事情

徳川家康は漢方に深い関心を抱き、薬草園を設けて自ら調剤も行ったという。また家康は毒殺を免れるために、附子に対する「万病丹」や水銀と砒素に対する「銀液丹」の微量摂取により、現代で言うところの「経口的減感作療法」を実践したことは特記される。

印刷技術の発達により家庭医学書の類が出回るようになり、一般庶民の医学知識も向上してきたが、細菌やウィルスなどには漢方薬では対応できなかった。

④三大慢性伝性病と三大急性伝染病

江戸時代の三大慢性伝性病は「梅毒」、「肺結核」および「ライ病」であった。特に「梅毒」は当時の伝染病患者の八割を占めたという。当時「梅毒」治療には軽粉（第一水銀）が処方されたが、副作用として水銀が体内蓄積して死にいたることが多かった。これを避けるために土茯苓が処方されるようになり、中国から莫大な量の土茯苓が輸入されて、幕府は民衆を「梅毒」から守るために莫大な額の支出を余儀なくされた。

肺結核には主として「人蔘」や「肉桂」が、ライ病には「大風子油」が処方され、次いで「大黄」、「黄苓」、「胡黄連」、「甘草」、「附子」、「縮砂」および「白尤」等が多用された。

江戸時代の三大急性伝性病は「赤痢」、「腸チフス」および「コレラ」であった。これ以外に天然痘やインフルエンザ等も猛威を振るった。

⑤徳川吉宗と薬草園

江戸中期になると、一般庶民の医学知識の向上等で薬草の需要が増加して供給が追いつかなくなった。これに伴い、徳川吉宗は日本国内に植生する有用植物の探索の奨励や、多くの薬草園を設置した。特に享保4年（1719年）に対馬藩から献上された6粒の種を基にした朝鮮人参の栽培を開始して、50年後に1万株に増殖させて全国に「御種人蔘」として下付したことは特記すべきである。

⑥現代における漢方薬と東洋医学の位置づけ

明治期の近代化の波は洋薬を主流に押し出し、漢方薬は片隅に押しやられて主役の座から遠ざかり衰退していた。近年、洋薬の発展にも翳りが見えるようになり、東洋医学に目が向けられるようになってきた。特に西洋医学でいまだに克服されていない「認知症」、「睡眠障害」および「不安」等の神経の高ぶりには「抑肝散」の、また「アルツハイマー病」等の血管性認知症には「釣藤散」の有効性がそれぞれに認められている。

羽生先生は1931年にお生まれになり、年齢を感じさせない若い容姿と迫力で、研修会場の参加者は始終押されっぱなしでした。先生は69歳にして関西大学文学部に社会人入学され、学部と大学院で7年間、大学研究室あるいは大阪道修町の「くすりの道修町資料館」でのご研究を実施され、博士論文「江戸時代に於ける唐薬受容研究」により「文学博士」号を授与されました。このバイタリティーの源は何かと非常に興味を持ちましたが、その回答を「理系の人間（先生は薬剤師）が文系の歴史を学んだら視点がどのように変わるのか、トンボのように複眼で見ると何が見えるのかという極めて素朴な発想に端を発し、お釣りの人生でこれを解いてみよう」との先生のご講演の中にみつけました。先生の尽きない好奇心とバイタリティーには心から敬服いたします。

本研修会の演題に同じくする「江戸時代、漢方薬の歴史」は、著書として2010年7月に清文堂出版㈱から刊行されており、羽生先生の学位論文を基にした非常に興味深い内容のものです。

羽生和子　著、
江戸時代、漢方薬の歴史、清文堂（2010）

交流会場にて

私ども世話人としましては、本研修会に参加することによりまして、羽生先生の著書の内容の理解に近づくことができたと感じ入った次第です。

今回、20 名を超える参加者中当学会非会員の方および東海支部会員のご参加もいただき、盛会のうちに研修会を開催することができました。研修会で十分な質疑応答の時間を確保できなかった代わりに場所を交流会場に移して活発な意見交換がなされました。

本年 6 月頃の第 4 回目の研修会には当関西支部評議員の服部　昭氏による「江戸時代の薬と包装」に関するご講演を予定しております。

これからも羽生先生がご健康で、精力的なご研究がなされることを祈念して、「第 3 回日本薬史学会関西支部研修会」のご報告といたします。

［新刊紹介］

久保千春監修　『ためになる医学史・年表』　2010 年度版
A5 版　115 頁　2010 年 10 月刊　5,040 円（㈲光原社）

科学史を学ぶ者にとって年表は座右に備えるべきものである。

本書は心身医学を専門とされる九州大学病院長の久保千春教授門下の千田要一、平本哲哉両医師に協力した光原社の編集長である砂押吉良氏によりコンパクトに見やすくまとめられた医学史年表で BC（紀元前）1600 頃のエジプト医学にはじまり、世界各国（インド、ギリシア、中国、日本、西欧、アメリカ、のすべての医学史上の主なエビデンスが、西洋紀年で 2010 年 1 月まで記されている。

医学史一口メモとして紹介されている 46 項目も未知のことや忘れかけた知識の再確認に有用である。巻末に「ヒポクラテスの誓い」、「ナイチンゲール誓詞」「ノーベル生理学／医学賞一覧」が付けられている。

最後に、科学史以外の政治、文化、宗教上の主要なエビデンスが「年表世界と日本」として 3 頁にまとめられて付いている。

参考文献、索引は A、B、C 順カタカナ表記（例、P. エールリッヒ）、カタカナ（例、ヒポクラテス）、ひらがな表記、漢字名（例、か、貝原益軒、ち、張仲景）に分かれているのも探し易く便利である。